

## 八丈方言における新たな変化と上代語

金 田 章 宏

千葉大学

**【要旨】** 八丈方言は万葉集東歌にみられる上代東国方言の文法的特徴を色濃く保存する方言である。本稿ではこの方言の研究史を概説し、伝統方言についての概略をのべたのちに、この方言に起こっている新たな変化をとりあげ、八丈町における「危機言語」への取り組みなどを紹介する。

この方言におこっている新たな変化とは、強変化動詞の完了=過去をあらわすアリ系の語形（ノモー）の、より単純化したタリ系の語形（ノンドー）への変化である。この変化は中央語においてはすでに上代から中古にかけて起こったもの（ノメリからノミタリへ）であり、それとおなじ変化が八丈方言においていま起ころうとしている。これを八丈方言の視点から上代語の変化のプロセスを考えることにより、上代以前は中央語の動詞完了形がすべて（ノミアリ）ノメリ形であり、上代をはさんで弱変化動詞、強変化動詞の順に（ノミテアリ）ノミタリ形へと移行していった可能性を指摘することができる\*。

**キーワード：** 八丈方言、東国方言、り・たり、テンス・アスペクト、上代語

### 1. はじめに

八丈方言は東国方言にみられる方言的特徴を色濃く保存していることで知られる。東国方言とは、奈良時代の万葉集の東歌（巻14）と防人歌（巻20）の2巻にみられる、中央奈良の言語、いわゆる古代語とは異なる方言をさす。東歌はおもに現在の関東とその周辺の人びとが詠んだ歌であり、防人歌はおもにかれらが九州太宰府の地で、あるいはその行き帰りなどに詠んだ歌である。この時代はもちろん、このあとの長い時代においても、中央語以外の方言がこのようにまとまったかたちで保存されている例はほかになく、日本語の成立を考える際の貴重な資料となっている。

万葉集の東歌と防人歌には、東国方言の特徴が文法や音声・音韻、語彙のすべてにわたってあらわれるが、八丈方言は大なり小なりそのいずれともかかわっていて、東国方言直系の方言であることをうかがわせる。青森から沖縄へとつらなる伝統方言の大きな幹から太平洋に突き出た接ぎ木のような存在であり、体系的にこれに類似する方言はほかにない。このように八丈方言はほかの本土諸方言との直接の関連がみられないため、過去においては所属不明の方言とまでいわれていたのである。

八丈方言の話者は東京都伊豆諸島南部の八丈島（人口八千人あまり）、青ヶ島（同

\*「5. 保存・教育・再活性化」を書くにあたって、八丈町教育委員会の茂手木清氏より町の取り組みに関する資料の提供を受けました。お礼をもうしあげます。また、査読者のかたからは貴重なアドバイスをいただき、最終原稿に反映させました。

180人ほど)にあわせて数百名ていどが存在するのみである。小笠原諸島の父島と母島、明治後期に八丈島民が開拓した沖縄県の南北大東島にも近代以降の移住者の子孫がわずかながら存在するが、伝統方言を体系的に保持する人はいないに等しい。

八丈島では、坂上地区(桧立, 中之郷, 末吉)の中老年層で相応に伝統方言を保持している。人口の集中する坂下地区(三根, 大賀郷)では老年層で相応に保持しているとみられるが、中年層では方言的な終助辞などがあらわれる程度で、語彙的にも文法的にも相当に標準語化が進んでいる。青少年層ではまったくといっていいほど方言が使用されない。人口の少ない青ヶ島にいたっては、伝統方言の話者はまさに数えるほどという状況である。

以下では、これまでの研究成果をもとに八丈方言に関する先行研究を概観し、音韻と文法の概要を述べたうえで、この方言に起こっている新たな変化を指摘する。そしてまったくおなじ変化が、中央では上代から中古にかけて起こっていたことを確認する。中央で起こった文法的な変化が千年の時を経て、いままさに八丈方言で起こっていることになる。

本稿では、東国方言形と八丈方言の表記には一部カタカナを使用する。とくに断らないかぎり、八丈方言は6地区(八丈島の三根, 大賀郷, 桧立, 中之郷, 末吉の各地区, および青ヶ島)のうち三根地区のもので、例文は民話や談話<sup>1</sup>, 八丈民謡「しよめ節」の歌詞である。八丈方言の例で地区名のないものは三根地区, 出典のないものは三根地区の奥山熊雄氏(1916~)からの聞き取り調査による。民謡と民話はすべて奥山熊雄氏による。既発表論文から多くを使用しているが、用例はできるだけ別のものに差し替えた。

## 2. 先行研究

八丈方言の研究史のうち、文法事項を中心とした記述について、その大まかな流れを確認しておきたい。

八丈方言に関する文法記述をはじめておこなったのは、Dikins and Satow (1878)である。Satowらは、この論文のなかで鶴窓婦山(1848)にある、八丈方言による「ウイデ祝い」の話をローマ字書きで紹介し、英訳と音声・文法の解説をつけている(465-470ページ)。そのなかで、外交官で日本研究者でもあるAstonの指摘にもとづいて、語形や語彙を万葉集巻14と比較し、八丈方言の形容詞連体形語尾keと万葉集との関係が指摘される。Satowらはこのkeを「文語のキのあきらかな訛り」としながらも、あわせてAstonが万葉集との関連を指摘していることを出典とともに提示していて、おなじ在日の英国人日本研究者たちのあいだで話題にのぼっていたことがわかる。八丈方言研究の緒として、八丈方言と万葉集東歌との関連をはじめて指摘した文献として、正当に評価する必要がある。

保科孝一(1900)は、日本人の手による初の本格的な論文である。記述は、音韻

<sup>1</sup> 筆者のホームページ (<http://www.akaneisc.com/Default.aspx>) で公開中。

論、文法論、文章論と広範囲にわたるが、文法を記述するなかでは、形容詞のケ連体形や動詞の連体形に注目している。名詞の格変化についても、主要な接辞を列挙し、地域的な差異にも言及していて興味深い。また、原因・理由のカラに相当する語形に「行コンテ」などがあげてあるが、のちの研究者には、これをニテからの変化であるとするものが目立つ。しかし、「てにをは」の項には『『ドァヨッテ』『どあから』是は『だから』の意味である』として「ワレドァヨッテ我だから」の例があげられているし、文章論の民話のなかにも「ソガンドァヨッテそれであるから」「ムゴクサレルヨンテ（ひどい目にあうから:引用者注）」という表現がみえていて、金田一春彦（1967:49）も指摘するとおり、この～ヨッテ、～ヨンテが～ンテのひとつまえの姿で、これがさらにヨリテにさかのぼることをしめす例として重要である。

保科（1900）が文法記述の点で重要な論文であることは疑いないが、それ以上に、小説の方言訳や民話などを、誤植は多いながらも、方言研究の基礎となるべき資料としてのこした点で、高く評価されるべきである。なお、この小説の方言訳には金田章宏（1995）が校訂をおこない、三根地区の発音によるローマ字表記と注を付している。

つぎに文法記述があらわれるのは、東条操（1934:45）である。東条は「関東方言」の「伊豆諸島方言」の章で、八丈方言には「形容詞の語尾変化に特殊なものがあり、九州方言にいくらか似た形が存在」し、「八丈島の形容詞は連体形に於ては万葉集東歌等に見られると同形の「高ケ山」（高い山）「デーチケヒト」（美しい人）を用いる、と書いているのだが、すでに Dikins and Satow（1878）がこれを指摘していることにはまったくふれていない。

八丈方言と東国方言との新たな関連を、日本人としてはじめて指摘したのは、北条忠雄（1948）である。北条は先学の論文だけをたよりに、東歌にみられる特徴が中央語のなまりではなく古形の保存されたものであるとして、すでに指摘のある八丈方言の形容詞連体形にくわえ、動詞の連体形についても、上代東国方言の保存されたものとみた。

国立国語研究所（1950）は、音声・音韻を中心とした本格的な報告書である。この報告書や保科（1900）、八丈島教育会編（1909a, 1909b）、それに日本放送協会編（1966）をもとに、現在では失われてしまった大賀郷地区の古い音韻体系を再構する試みを、金田章宏（2000）でおこなった。

分析の困難な現象もふくめ、数多くの文法現象を実例でとりあげて可能なかぎりの分析をおこない、現在でも八丈方言の基本文献のもっとも重要なひとつとなっているのが、飯豊毅一（1959）である。これはいわば、音声・音韻を中心とした『八丈島の言語調査』の文法版で、このときの調査資料をもとに、詳細な分析・記述をおこなったものである。飯豊（1959）をもって、語形や広義派生形式のとりだしという点でひとつのピークをむかえる。

八丈方言の特殊性が認知されるようになると、方言区画のなかでの位置づけも相応のものとなる。平山輝男（1958:306）は「東条操先生の分類表に八丈方言その他

にわずかに私見を加えたもの」としているが、けっして「わずか」などではなく、東日本のなかを東部、北部、八丈島、と下位区分した金田一春彦（1955）の区画をもこえて、八丈方言を、東部、西部、九州とならぶ四本柱の一区画として位置づけた。現地調査をおこなった研究者による区画であることに、大きな意味がある。金田一（1955: 215）も、動詞・形容詞の連体形などの例で比較しながら、「八丈島の方言は、語法に著しい特色を有し、特色の幾つかは、全国の他のすべての方言に対して対立する」と明言し、既述の金田一（1967: 48）では、保科（1900）、北条（1948）ともうひとり、八丈方言を「全国の方言の中できわめて特殊な地位に立つものと解釈」した平山（1958）に対して、「深い敬意を表さなければならない」としている。

服部四郎（1968: 93）は、東国方言が非日本祖語的な特徴を保存している可能性に、以前から注目していて、この「残存的特徴を含む非日本祖語的特徴を、少なくとも現代の東日本の諸方言に見出すことが、長い間私の関心事の一つであった」とする。その土台にあるのは、「東歌・防人歌の東国方言と日本祖語との分岐の年代は、現在の近畿方言と琉球方言の分岐年代よりも古い、という仮説」である。服部はこの年、実地調査をおこない、「予想通り「八丈島方言は東歌東国方言の系統をひく非日本祖語的方言が現在の（日本祖語系の）本州東部方言の同化的影響を著しく受けつつ成立したもので、まだいくたの非日本語的特徴を保存している」という仮説を支持すると見做し得る資料が得られた」とした。そのうえで、形容詞の -ke 連体形に関しても、琉球方言と比較しながらの、動詞の -o 連体形と -u（連体=）終止形に関しても、「八丈方言は少なくとも内地方言に対立する方言」であることをくりかえし主張する。

上村幸雄（1971: 31）は八丈方言の重要性をとき、「八丈島の方言は、奈良時代の奈良の日本語よりもさらにふるいかもしれない要素をもちつづけてきた可能性があつて、方言学的にみてたいへんに貴重な方言だといえるのである」とのべる。上村氏はこの前年におこなわれた国語研究所の調査の一員であるが、この調査をもとにした上村幸雄（1975）は、保科（1900）以来のまとまったテキストを提供してくれもので、文法事項に関する注もムダのない適切なものである。このときの録音テープが数時間分、未整理のまま島内に保存されていて、上村氏の承諾をえて一部を金田章宏（1999, 2001b）に文字化した。さらにこのときの調査に刺激されて島内各地で地元の人による録音がなされていて、いまとなつてはどちらもたいへん貴重な資料であり、これらのデータ化がすすめられれば、今後の研究に大いに貢献するものと期待される。

奥山熊雄・金田章宏（1990）以降、筆者は八丈方言の記述をさまざまな角度からおこない、金田章宏（2001a）では動詞形態論を中心としながら、音韻体系から名詞の格変化、形容詞の活用、テキストなどもふくめて八丈方言の概要をまとめた。

工藤真由美（2000）は、言語学の知見をもとに、全国レベルで方言アスペクトの調査・研究をおこなう一環として、八丈方言のアスペクト・テンス対立の歴史的展開にも仮説をさしだしている。

文法記述に関しては、これ以降目立った成果がみられないが、この方言の重要性和その危機的な状況を考えあわせると、地区ごとのより詳細な調査研究が急がれる。あわせて、保存・再活性化の取り組みが急務である。

### 3. 八丈方言の諸特徴

#### 3.1. 八丈方言の音韻的特徴

本稿ではおもに文法的特徴についてのべるが、この方言の概要をしる手助けとして、音韻的な特徴についても簡単にふれておく。

八丈方言の短い母音は基本的に5母音で、標準語と大きくかわる点はない。この方言の音韻的特徴は、単純な母音連続だけでなく、半母音 w や子音 r, h, k などをはさむ母音連続が融合し、地区ごとにことなる長い母音（長母音、二重母音）になる点である。この長い母音の違いだけで、どこの地区の出身かがおおよそわかる。

表1 三根地区、中之郷地区、末吉地区の、長い母音の基本的な対応関係

三根	末吉	中之郷	変化まえのおもな音連続と例
i:	i:	i:	ie ue ui usi
kuni:	kuni:	kuni:	クニ (kuni ; 東京～伊豆諸島以外の日本) へ
e:	e:	ja:	ai asi aju ae ase ame
jame:	jame:	jamja:	ヤマ (jama ; 畑) へ
ei	i:	e:	ie ei ee eo oi osi oe
mei	mi:	me:	目 (me) を
o:	a:	oa	aa awa ama ao awo aro ako oa owa
ito:	ita:	itoa	板 (ita) を
ou	o:	o:	owo omo oho awo amo
tou	o:	o:	戸 (to) を
u:	u:	u:	uwo usu
saru:	saru:	saru:	サル (saru) を

例にはすべて格形式における融合をあげたが、単語内部でも基本におなじような融合がおこる。どの母音連続がどう融合するかは複雑で、たとえば、三根の o: になるのは、aa, awa, ara, aro, ako, awo, oa, oha, owa など、また、三根の ou になるのは、owo, omo, oho, awo, amo などである。このうち awo はどちらにもみえるが、単語の内部か文法的な要素かによって、あるいは融合の段階の違いによって融合のしかたが違ってくるし、また単語の音節数によっては融合の有無に違いもでてくる。(詳細は金田 (2001a) 参照)

長い母音では地区によっていくつか特徴がある。たとえば、中之郷の e: は短母

音の e よりもかなり狭くあらわれるし、おなじく o: も短母音 o よりも丸口で狭いが、このような特徴は伝統方言でもかなり高齢の話者にみられたもので、現代方言ではほとんどどうしなわれている。

### 3.2. 八丈方言の文法的特徴

ここでは動詞を中心に、アスペクト・テンス・ムードにかかわる文法現象の概要についてのべ、そのあとで係り結びなどそのほかの古風な文法現象にふれる。なお、万葉集の表記や訓読は佐竹昭広ほか校注(2002, 2003)を使用した。万葉集の例文のあとの数字は巻：歌番号である。また、方言訳のなかで、名詞の語形については「～をは」のように直訳的に訳してある。

#### 3.2.1. アスペクト・テンス・ムードをめぐる

##### ① 動詞のオ段連体

古代中央語の動詞の連体形はたとえば「降る雪」のようにウ段「る」で名詞につづくのに対して、東国方言ではフロ雪のようにオ段になる。

- (1) <sup>かみつけの</sup>上野伊香保の嶺ろに降ろ(布路)<sup>よき</sup>雪の 行き過ぎかてぬ妹が家のあたり (14: 3423)
- (2) 行こ(由古)先に波なとゑらひ <sup>しろへ</sup>後方には子をと妻をと置きてとも来ぬ (20: 4385)
- (3) うべ兒なは我に恋ふなも 立と(多刀)<sup>つく</sup>月ののがなへ行けば恋ふしかるなも (14: 3476)

八丈方言でも同様に動詞の連体形はオ段であらわれる。

- (4) ハネクンデ フンバロ ナセン ソノ フンドウシガ ハギメカー ヒッキレテ ブッコテトーデ ((相撲で) 取り組んで ふんばる 拍子に その フンドシが 接ぎ目から 切れてしまって 落ちたので) [民話・ハウエン越し]
- (5) ボラーザイー デロ トキニ オンブサツテ ハラメデ ナー。(洞輪沢へ 行く ときに おぶさって 妊婦で ね。) [談話・末吉]
- (6) コシン ツリーテ アロ モノウ テツ ワレンモ タモウリンノーカーテ ユトワ (腰に つるして いる もの ひとつ 私にも くださいますか かと いうと) [民話・桃太郎]

このあとで述べる動詞本体にアリのついた語形(以下、アリ形)に対し、このようなアリのつかない語形を非アリ形とよぶことにする。この非アリ連体形に終助辞ワやジャなどがつくると終止形として使用される。例(7)で、直訳で「行くよ」にすると未来になるのだが、つぎの例(8)とおなじく現在の意味で使用されている。

- (7) ケイワ ドコソコドンネイノ ナヌカデ テラメーリン イコワ。(きょうは どこそこ殿の家の 七日で 寺参りに 行くところだよ。) [民話・水守]
- (8) ハルガ キタロウ ショクナク アリヤリヤ ナイテ ツゲロジャ ウグユスガ (春が 来たのを 知らずに いたら 鳴いて 告げるねえ ウグイスが) [春山節]
- (9) ハノ ジョウブン ナロワ。(歯が じょうぶに なるよ。) [談話・三根]

この方言では動詞の非過去終止形が現在の意味で使用されることがあるが、これについてはあとで詳しく述べる。

## ② 動詞のノマロ形

八丈方言の動詞のノマロ形は本動詞「飲む」と補助動詞「あり」の組み合わせである「飲みあり」の連体形「飲みある」に対応する語形であるが、ここにはふたつの現象がふくまれる。ひとつは動詞のオ連体とおなじもので、補助動詞「あり」の連体形「ある」がオ段のアロとなる現象である。もうひとつは、「飲みある」が融合して、古代中央語で「飲める」とエ段になるところを、飲マロとア段になる現象である。この形は現在の結果の状態の意味で使用される。万葉集東歌の連体形の例をあげる。

- (10) 青柳のはらろ(波良路)川門に汝を待つと 清水は汲<sup>せみど</sup>まず 立ち<sup>どなら</sup>処平すも (14: 3546)
- (11) 夕占<sup>ゆふけ</sup>にも今夜<sup>こよひ</sup>と告<sup>の</sup>らろ(乃良路) 我が背<sup>せ</sup>なは あぜそも今夜<sup>こよひ</sup>よし<sup>の</sup>来まさぬ (14: 3469)

八丈方言のなかでも高齢層が使用するより古い方言では、強変化動詞(四段活用)ではノマロ、弱変化動詞(一段活用)ではテをふくむミタロ(見た)が連体形としてそのまま使用されたが、現代方言ではrが脱落して、(t) aro > (t) ao > (t) o:のように融合したノモー、ミトーが使用される。しかし、この連体形をもとにした過去の終止形では融合せず、ノマロ、ミタロに終助辞ワが融合して\*ノマロワ>ノマラ(飲んだよ)、\*ミタロワ>ミタラ(見たよ)となる。

なお、すでに述べたように二重母音や長母音は地区ごとに規則的な対応関係があつて三根地区とは別の母音であらわれることがある。したがって、上記の説明が該当するのはあくまで三根地区についてである。

- (12) ヌキダリン カケトコー(<カケトカロ) キミヨ ハジーテ キテ(軒先に かけておいた キビを はずして きて) [民話・桃太郎]
- (13) カケザラワ ソイガ イチネンジュウ キナゲートー(<\*キナガシタロ) ヘビロー イセイ デテ ウシヨデ アラッテ(欠け皿は 自分が 一年中 着つづけた 着物を 磯へ 行って 海水で 洗つて) [民話・欠け皿]
- (14) カビアヨワ ツ布林 ノセテ ササガラ(<\*ササガロワ)。(桑の葉をは

- 頭に のせて はこんだよ。) [談話・中之郷]
- (15) アー ホントー ソガンダー コトガ アララ (<\*アラロウ) ナー。(ああ 本当 そのような ことが あった ねえ。) [談話・末吉]
- (16) ワガ オッカサンラガ ハナシイテータラ (<\*ハナシイタシタロウ)。(私のお母さんたちが (そんなふうに) 話しましたよ。) [談話・三根]

### ③ 過去の「き」をもつ語形

中央では鎌倉時代になると過去の「き」が衰退していくが、それに呼応するように、現在テンスにかかわっていた「飲みたる」が「飲んだる」から「飲んだ」になって現在離れをおこし、過去の「き」にとってかわる。

後述するように、八丈方言の非アリ形とアリ形がそれぞれ〈現在の動作や変化の進行〉と〈結果の状態〉をあらわすことができるのは、現在から切りはなされたアオリスト的な過去をあらわす「き」がかりうじて生きていたからである。この方言の\*ノミシ (>ノンジ), \*ノミアリシ (>ノマツチ), \*ノミアリアリシ (>ノマラツチ) に由来する語形は、多少のニュアンスの違いをもちながらも、みな現在から切りはなされた過去をあらわす。

- (17) ホウジガ (<\*ホホミシガ)。(口に) ふくんだっけなあ。
- (18) ウクデコー ノンジネー (<\*ノミシナレ) ! ((まさに) あそこでコソ飲んだんじゃない!)
- (19) アッチトキ (<\*アリシ トキ) (以前・まえに)
- (20) キョネン オトトシヤ オドラツチ (<\*オドリアリシ) サマモ イマジヤ トウロウノ フサト ナリ (去年 おとしは (元気に) 踊った あの方も いまでは (亡くなって) 灯籠の 房に なった) [民謡・しよめ節]
- (21) ナブレカクレニ オジャラツチ (<\*オジャリアリシ) サマモ イマジヤ アシダデ チョウチンデ (こっそり隠れながら (私のもとにかよって) いらっしゃった あの方も いまでは (堂々と) 足駄で 提灯で) [民謡・しよめ節]

以上は終止形と連体形の例で、つぎは順接と逆接の接続形の例である。はじめの例の～ンテは「よりて」に由来し「から」に対応するもので、「にて」から変化して「ので」に対応する～デとはことなる。

- (22) ウノトキ ンーマソウニ ノンジンテ (<\*ノミシヨリテ) ヨッポド スキデカ アンノウ (<\*アルナモ)。(あのとき おいしそうに 飲んだから よほど (あれが) 好きで あるんだろうなあ。)
- (23) ンー ウイガ デンラー ヨキー ハイテイ ハナシチガ (<\*ハナシシガ) マニヤ アダン ナツテ アルカ ノー。(んー あの人が 電話を よこして 長時間 話したが いまは どう して いるか なあ。)

- (24) キネイワ フッチドウ (<\*フリシドモ) ケイワ アダダカ。(きのうは降ったけど きょうは どうだか。)

#### ④ テンス・アスペクトのシステム

中央語における過去「き」の消滅は、アスペクト形式「飲みたり」がテンス形式に移行するのと表裏の関係にあった。同時にそれは、あらたなアスペクト形式「飲んでいる」の誕生とも連動するわけで、このどれかひとつだけが単独で変化したり、発生したりすることはない。この方言にかろうじて「き」がたもたれていたということは、「り・たり」のアスペクト形式の意味も相当程度に保存されていたことを意味する。

八丈方言の「り」形は上代語「飲めり」とはことなり、上代東国方言とおなじタイプのノマラ (<\*ノミアロワ)である。万葉集の東歌と防人歌は、詠み人自身というよりはむしろ、中央からやってきた役人などによってその多くが文字にのこされたのではないかと推測されているが、おそらくそのせいで、中央語的な音におきかえられている部分が相当あるとみられる。それらを八丈方言の文法から、あるいは東歌と防人歌の東国方言らしさを法則化することで、たとえば「雪かも降らる(3351)」ではなく「雪かも降らろ」というように、より東国的な音に再構成することが可能となる。今後そうした視点からの検討があつてしかるべきである。

テンス・アスペクトに関して、八丈方言の現状は、過去形がふたつあるのをのぞけば標準語とおなじようにみえる。すなわち、完成相(飲む。)の非過去のノモワ(飲む。)と過去のノマラ・ノマララ(飲んだ。),そして継続相(飲んでいる。)の非過去のノンデアロワ(飲んでいる。)と過去のノンデアアララ(飲んでいた。)という構成である。

表2 標準語のテンス・アスペクト

	未来	現在	過去
完成相	飲む	—	飲んだ
継続相	(飲んでいる)	飲んでいる	飲んでいた

表3 八丈方言のテンス・アスペクト1(標準語タイプ)

	未来	現在	過去
完成相	ノモワ	—	ノマラ・ノマララ
継続相	(ノンデアロワ)	ノンデアロワ	ノンデアアララ

しかし、この方言では過去のチ形が、現在ではあまり使用されないとはいえ少しまえまでは健在だった。そして、一部の語形にはチ形の保存と相関するアスペクトの用法がのこっているのである。

過去形のノマラは、アリ形の連体形ノマロに終助辞ワが接続して融合したもので

ある。この終助辞ワは標準語の「よ」におおよそ対応するが、主要な終助辞にはもうひとつ、ジャがある。これはコピュラの～ダに対応する西日本方言のジャとはことなり、その同意求め的な意味用法から「にては」に由来するとみられるもので、標準語の「ね」や尻上がりの「よ」におおよそ対応する。この方言の終止形は、疑問詞疑問文の述語が終助辞なしの連体形（と同音の終止形）であられるばあいなどをのぞいて、連体形にこれらの終助辞がついてはじめて終止形として使用される。このうち、終助辞ワのノモワ、ノマラは標準語と同様、基本的には非過去と過去の対立に使用され、一部の再帰動詞などの非過去形に現在テンスの用法があるだけだが、終助辞ジャのノモジャ、ノモージャ（<\*ノミアロジャ）のほうは、それぞれ非過去と過去に使用される以外に、それぞれ現在の動作の継続と結果の継続にも使用される。

つぎの例(25)(26)は、動作主体が自身の体の部分に対して動作をするという再帰的な動詞の例である。

- (25) A: マニヤ アニョ シテ アロ? (いま なにを して いるの?)  
 B: カラドー フケロワ。(体を ふいているよ。)
- (26) ヤメロンテ モモワ。(痛いから 揉んでるよ。)

このほかに、アオレロワ（自分を扇いでいるよ）、カコワ（かゆいところをかいているよ）、スリタテロワ/ナデロワ（痛いところをなでてるよ）などが現在進行の意味で使用される。このうち、フケロワとアオレロワは再帰的な意味専用の動詞であり、もし動作主体の体でなく、だれかほかの人の体をそうするのであれば、フコワ、アオロワというべつの動詞が未来テンスでのみ使用される。

終助辞ワの非アリ形が現在テンスで使用されるのはこのように限定的であるが、終助辞ジャの非アリ形はよりふつうに、受け手発言で話し手の現在の動作をあらわしたり、先手発言で聞き手の現在の動作をあらわしたりする。つぎの例(30)は第三者の現在進行中の動作をみての独話的な用法である。

- (27) A: アニョ ショーイ? (なにを してるの?)  
 B: メシヨ カモジャ。(ご飯を 食べてるよ。)
- (28) A: ヨフカシ アニョ ショ? (夜遅くまで なにを してるの?)  
 B: シンブンヨ ヨモジャ。(新聞を 読んでるよ。)
- (29) タバコウ ノモジャイ。(タバコを 吸ってるねえ。)
- (30) コドモラガ ナカヨク アスボジャ。(子どもたちが 仲良く 遊んでるね。)

終助辞ジャのアリ形は、非アリ形が現在テンスに使用されるほどには現在の結果継続の意味で使用されないが、つぎのような例はある。

- (31) ウゴン アメガ フットテイ スグ ジメンワ フッコークージャ。(あんなに 雨が 降ったのに すぐ 地面は かわいてるねえ。)(《地面を見ながら》)

- (32) フタガジーマドッテ フタギンノーテ ヘーメガ タカッテ ヘーノコウツケトージャ。(面倒がって 蓋をしなから ハエが たかって ハエの卵を つけてるねえ (=産んでいるねえ。))《卵を見ながら》
- (33) ウノヒトワ カンノンギョウニ ニトージャ。(あの人は 観音經に 似ているねえ。))《「小難しい人だ」の意》

うえの例 (33) と同じように関係などをあらわす動詞では、終助辞ワのアリ形が現在の状態の意味にも使用される。

- (34) トトウガ ジン ニタラ ノー。(お父さんの 字に 似ている ねえ。)
- (35) マルデ イヌツクショウニ ニタラ。(まるで 犬畜生に 似ている。))《「犬畜生みたいだ」の意》

これらの用法は、まさにチ形が健在だったころの名残りともみられるものである。これをもとに現在よりも一段階まえのテンス・アスペクト状況を表にするとつぎのようになるだろう。

表4 八丈方言のテンス・アスペクト2 (一段階まえのタイプ)

	未来	現在		過去
		進行	結果	
総合形	ノモワ	ノモワ	ノマラ	ノマラ・ノマララ
分析形		ノンデアロワ		ノンデアララ

以上は、叙述法の述語の例であるが、この方言には感嘆法に使用される語形がべつに存在する。ここでは非アリ形の現在進行とアリ形の現在結果の対立がさらに明確にあらわれる。

感嘆法の語形は、非アリ形とアリ形の連体形にヲに由来するヨが接続、融合したものだが、このヨは格助辞「を」以前の感動詞「を・をを」の用法をうけついでるようにみえる。

感嘆法非アリ形は、目のまえで進行中の動作や変化の詠嘆的表現に使用される。

- (36) バー コラ ノモウ! (まあ この人は 飲んでいる!) 《動作の進行》
- (37) ミロ コノ カンモワ クサロウ! (みる この サツマイモは くさりかけている!) 《変化の進行》

動作動詞であっても、進行中の動作ではなく、その動作にはいること、つまり動作の開始過程を変化の進行としてとらえたばあいにも、この語形が使用される。

- (38) バー カモウ! (あ 食べる!) 《口に入れる瞬間》
- (39) バー ウラ コブソウ! (あ あの人 こぼす!) 《いまにもこぼしそうな瞬間》

感嘆法のアリ形は動作や変化の結果をみて、それを詠嘆的に表現するのに使用される。話し手はその動作や変化を直接みているか、そこに存在する痕跡などがその結果であることを確信している。例(40)(41)が動作動詞、例(42)(43)が変化動詞である。

- (40) バー コレイ カザラロウ！(おやまあ こんなのを かざっている。)《「かざらなくてもいいのに」の意》
- (41) キー コゴン ジョウズン カカロウ！(おやまあ こんなに じょうずに書いている!)《書かれたものをみて》
- (42) バー フッコウカロウ！(おやまあ (すっかり) かわいている!)《土砂降りの直後、道が強い日差しで》
- (43) アイ コラ ヒツツカロウ！(おやまあ これは くつついている!)

動作が進行中であっても、それを開始後の状態ととらえたばあい、この語形が使用される。

- (44) バー ウイガ ヘイタロウ！(おやまあ あいつが 泣いてる!)《「絶対に泣かないとっていたのに」の意》
- (45) バー コラ ノマロウ！(おやまあ この人は 飲んでる!)《「もう酒は飲まないとっていたのに」の意》

こうした用法は、西日本方言で動作の継続と変化の結果の継続を区別するヨル・トル対立によくにている。しかし、ヨル・トル対立がそれ自身テンス・ムードなどで語形変化する派生形式によるものであるのに対して、八丈方言のこの用法は活用形=語形による対立である。

非アリ形とアリ形のこうした用法は、古代語のアスペクトを彷彿とさせるのではないだろうか。チ形をいれて、この方言のより古いテンス・アスペクト対立をしめせばつぎのようになる。

表5 八丈方言のテンス・アスペクト3 (古代語タイプ)

未来	現在		過去
	進行	結果	
(ノモワ)	ノモワ	ノマラ	ノンジ

ところで、この方言では人の存在もものの存在もすべて「ある」のアロワであり、補助動詞にも使用される。また、その否定も「ない」のナッキヤである。しかし、現在では死語化していて、生きた方言としてはほとんど使用されなくなったとはいえ、何十年かまえまでは「をり」のオロワも本動詞(例(46)(47))や補助動詞(例(48)～(51))として使用されていて、明治期の記録や古老の記憶、そしてまだ青ヶ

島の方言にかろうじてそれを確認することができる。

- (46) ソゴンドー ヒトモ オーラ (<\*ヲロウ)。(そんな 人も いるよ。)
- (47) ウラ ハンズメ ココン オーライドウ (<\*ヲリアレドモ) マニャ ドコダロウ?(あの人は さっき ここに いたけど いまは どこだろう?)
- (48) アセイワ トトウン ニテ オーラ。(兄は 父に 似て いる。)
- (49) ココデ ノー ノンドロガ (<\*ノミテヲロガ) ドケイ イッタロウ?(ここで ね 飲んでいたけど どこへ 行っただろう?)
- (50) バー マン ココン ノー アットロガ (<\*アリテヲロガ) ドケイ マジャケタロウ?(おやまあ いま ここに ね いた(あった)けど どこへ 消えただろう?)
- (51) オジャラットロガー (<\*オジャリアリテヲロガ)。(あの人はさっきまでここに) いらっしやいましたよ。[談話：青ヶ島]

### ⑤ 推量のナモ

古代中央語では推量をあらわすのに「む、らむ」という要素が使用されるが、東歌ではそれがモ、ナモのように、動詞連体形とおなじオ段であらわれ、かつ、rがnであらわれる。

- (52) <sup>かみつけのおど</sup>上毛野乎<sup>たどり</sup>度の多<sup>ど</sup>杼里が川路にも 児らは逢はなも (安波奈毛) ひとりのみして (14: 3405)
- (53) 比多<sup>き</sup>濁の磯<sup>そ</sup>のわか<sup>き</sup>めの立ち乱え 我をか待つなも (麻都那毛) 昨夜も今夜も (14: 3563)

八丈方言ではこの連体形ナモの変化したノウ (例 (54) ~ (56)) や已然形ナメの変化したネー (例 (57)) が推量形のもとになっている。ナモがノウに変化したのはおそらく連体形母音オからの逆行同化 (namo > nawo > nowo) によるもので、同化後にこの方言に規則的な融合 (nowo > nou) を起こしたものである。こうした変化は amo からだけでなく、ワ行のア段動詞「歌う」(\*utawowa > \*utowowa > utouwa) のように awo からも起こっており、連体形で a\*o > o\*o > ou という変化が起こったことがわかる。

- (54) ハヤ ジューネングレーニワ ナルナオワ タテテ。(もう 10年ぐらいには なるだろうよ (社を) たてて。)[談話・青ヶ島]《三根ではナルノウワ》
- (55) マンダートワ テレビン マイニチ ホーソーサリーシタンノーワ。(いまならテレビに 毎日 放送される場所だったろうよ。)[談話・末吉]《三根ではホウソウサレイシタンノウワ》
- (56) ハー コイデ ヨカンノウジャ。(もう これで いいだろう。)[民話・欠け皿]

- (57) ウラ ノムニャードー ワラ ノミンナカ。(あいつは 飲むだろうけど  
私は 飲まない。) [談話・中之郷] 《三根ではノムネードウ》

### 3.2.2. そのほかの文法現象

八丈方言における文法的な古さは、以上のほかにも、東国方言にみられる形容詞の工段連体形や強調と疑問の係り結びなどにもみられる。そのいくつかをとりあげる。

#### ① 形容詞の工段連体形

中央語の形容詞連体形はたとえば「高き山」のようにイ段の「き」で名詞につづく。これが東国方言ではタカケ山のように工段となる。

- (58) <sup>かみつけのくろほ</sup>上毛野久路保の嶺ろの葛葉がた かなしけ (可奈師家) 兎らにいや離り来も  
(14: 3412)
- (59) 悩ましけ (奈夜麻思家) 人妻かもよ 漕ぐ舟の忘れはせなな いや思ひ増す  
に (14: 3557)
- (60) 旅行きに行く<sup>あもしし</sup>と知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ (久夜之氣) (20:  
4376)

形容詞の連体形は八丈方言でも同様に工段であられる。

- (61) ニヨコメニワ ママコドー イレーニ ノーモ キターナケ カケザラーテ  
ヨ ノー ツケ (長女には 継子である ために 名をも きたない 欠  
け皿と いう 名を つけ) [民話・欠け皿]
- (62) ナカノ ヨーケ コモタズノ トショリフーフガ アララッテイガ (仲の  
いい 子持たずの 年寄り夫婦が いたそうだが) [民話・桃太郎]
- (63) ネッコケ トキニワ カサネギョ セーテ ポウク ナロシャン タケノ  
カワ (小さい ときには 重ね着を させて 大きく なるにつれて 竹の  
皮 (のように薄着に)) [しよめ節]

この連体形に終助辞ワがついて融合したタカキャ (高いよ) や、融合せずにそのままジャがついたタカケジャ (高いねえ) などが終止形として使用される。

- (64) タカウノー オツッテ キテ ニツケロダイバ シーマキャ。(タケノコを  
折って きて 煮付けると うまいよ。) [談話・青ヶ島]
- (65) アニーテ ユカ ショクナツキャ。(なんて いうか 知らないよ。) [談話・  
青ヶ島]
- (66) オモシロケジャ ナ ワガコノ ナコワ テラノ デイシュンドンノ キョ  
ウヨリモ (おもしろい ねえ うちの子の 泣くのは 寺の デイシュン殿  
の 経よりも) [しよめ節]

- (67) ソゴンダーバ ノウ イッテモ ヨケジャ。(そうなら ね (そこへ嫁に) 行っても いいよ。)[民話・吉浦の波]

## ② 強調と疑問の係り結び

八丈方言にはコソに由来する強調の係り結びと、カに由来する疑問の係り結びが存在する。

コソに由来する強調の係り結びには、コソワが融合したとみられるカによるもの(例(68)～(70))と、さらにそれにワの融合したコー(地区によってはコア、カー)によるもの(例(71))との2種類がある。これらによって強調されると、古代語同様、述語はいわゆる已然形になる。方言話者にはほとんど意識されないようだが、後者コーのほうがより強調が強いようで、結びにはノダのような意味の指定ナリの已然形ナレが変化した、ネー(地区によってはネァ)が義務的である。

- (68) ワリヤナ オメイヤカ タレドノ スナヲ トリテ オガメガ カミガミニ (わたしは (あなたを) 思っているからコソ 垂土(砂浜の名)の 砂を取ってきて 拝むのです 神々に) [しよめ節]
- (69) タケボーキデカ アラレ。タケデカ カコァダレ。(むかしの箒は) 竹箒で コソ あったよ。竹でコソ 掃いたんだよ。)[談話・中之郷]
- (70) ジブンノ ウチデカ ワケーテ ハイレガ。(自分の 家でコソ (風呂を) 沸かして 入るよ。)[談話・青ヶ島]《「自分の家でしか入らない」の意》
- (71) ソノ イトーコア ネングニ オサメタンネァ。(その 糸をコソ 年貢に納めたんだよ。)[談話・中之郷]

終助辞のひとつに「～ですけど。」といったニュアンスをもつガがあるが、これが強調辞のカとコーに対応して、カで強調されたときはガのままだが、コーで強調されるとガにもワが融合してゴーとなってあらわれる。

- (72) アガカ ソゴン ヤレガ (<\*イヒアレ・ガ)。(私がコソ そう 言ったんだけど。)
- (73) アガコー ソゴン ヤンネーゴー (\*イヒアルナレ・ガワ)。(私がコソ そう 言ったんだけど。)

カに由来する疑問の係り結びは、質問というよりも～カナアという自問自答的な(うたがい)の用法が基本である。古代語の係り結びと同様、述語はいわゆる連体形(これも筆者は終止形のひとつに位置づける)になるのだが、動詞本体のそれではなく、この構文に義務的な推量「らむ」の東国方言形「なむ」の連体形である。結びにはこの推量のナモ(の変化形)が義務的で、疑問詞の有無にかかわらず使用される。さいごの例(76)は反語的な用法である。

- (74) チャカレタ ナナチャノ カケラヲ ホレイ ツキカ スノウ(<\*スナモ) ト ノセテ ミル(割れた 飯茶碗の かけらを ひろい くつつきカ す

るかなあと のせて みる) [しよめ節] 《「くつつくかなあ」の意》

(75) ドウダケカ アンノウ (<\*アルナモ)。(どのくらいカ あるかなあ。)

(76) コノ カケザラワ アニョカ オスナルノウ (<\*オスナルナモ)。(この  
欠け皿は (まったく!) なにをカ 言ってるんだろう。)[民話・欠け皿]

### ③ 否定形にみられる「ず」以前の形態

この方言には否定の「ず」のもとになったとみられる語形が存在する。古代語の否定「ず」は奈良時代にはすでに「ず」であり、おなじ否定系列である「ぬ」や「ね」と子音が異なっていた。これについては、ごくわずかな例から「にす」が変化したものである可能性が指摘されている(山崎良幸(1965), 小林賢次(1968)など)が、定説とまではなっていない。

一方で、八丈方言の否定過去断定形や否定非過去推量形には「ず」以前の姿がたもたれている。否定の要素はもともとナ・ニ・ヌ・ネのように「ふつう」に変化したとみられるが、その連用形ニとサ変動詞のヌの連用形に由来する、ニシをふくむ語形がそれである。

ひとつは否定の過去形で、\*ノミニシアリアロワからノミンジャララ(飲まなかった。)が、もうひとつは否定の推量形で、\*ノミニシアルナモワからノミンジャンノウワ(飲まないだろう。)が成立している。このことは「ず」がすでに定着して「○・○・ず・ぬ・ね」という不規則な〈活用〉になっていた上代よりも以前のすがた「○・○・に・○・ぬ・ね」の「に」を、この方言が保持している可能性をしめすものである。ただ一点、日本語諸方言のほぼすべてにおいて、いわゆる未然形が否定形式のもとになっているのに対して、この方言ではいわゆる連用形に否定の要素「ぬ」の連用形「に」が接続して否定形式が成立した理由を、まだ説明することができない<sup>2</sup>。

いまだ出自不明とされる母音 a の未然形をもとにするよりも、接続の基本である連用形をもとにしているほうが、説明は容易であるのだが、受動動詞と使役動詞はこの方言でも中央語と同様、未然形接続である。なお、ノマズン(飲まずに)のような未然形接続の語形もノミズン(飲まずに)とともに使用されるが、これらはともにのちの移入形式とみられるもので、移入してきたノマズンから連用形接続にあわせたノミズンがつくられて、併用されているものとみられる。

つぎの例(77)は、動詞連用形イェミ(笑み=口を開く・割れること)+ニシ+アル+推量ナモ+終助辞ジャ(<\*ニテハ)が変化したものである。

(77) コレガ コーベワ マダ イェミンジャンナオジャ? (これ(=椿の実)の皮は まだ 割れないだろう?) [談話・青ヶ島]

(78) フロイッパーノ ミズー タミーシャーテワ ホントーン ナナタビモ

<sup>2</sup> 千葉県山武方言に「～しないし」の意味のならべ形にノミシツ(飲まないし)、ミーシツ(見ないし)、シーシツ(しないし)があり、これを伊藤一也(1983)は弱変化動詞からの類推で強変化動詞でも連用形をもとにした否定形がつくられたと推測している。

トータビモ イカズニワ フロイッペーノ ミズワ タマリンジャララ (<\*タマリニシアリアロワ)。 (風呂いっぱいの水を ためようとしては 本  
当に 7回も 10回も (水汲みに) 行かなくては 風呂いっぱいの水は  
たまらなかったよ。) [談話・末吉]

#### 4. 八丈方言における新たな変化と上代語

現在, 八丈方言にはある変化が起こりつつある。しかしこの変化は, 中央ではす  
でに上代の前後に起こっていたものである。

伝統的な八丈方言では, 強変化動詞の過去・完了形はリ形 (例 (79) ~ (81)),  
弱変化動詞の過去・完了形はタリ形 (例 (84) (85)) である。強変化動詞のうちの  
サ行動詞 (例 (82)) とサ変動詞 (例 (83)) はタリ形になる。

- (79) カビァヨワ ツ布林 ノセテ ササガラ (<\*ササギアロワ)。 (桑の葉を  
は 頭に のせて はこんだよ。) [談話・中之郷]
- (80) アー ホントー ソガンダー コトガ アララ (<\*アリアロワ) ナー。 (あ  
あ 本当 そのような ことが あった ねえ。) [談話・末吉]
- (81) ヌキダリン カケトコー (<\*カケテオカロ) キミョ ハジーテ キテ (軒  
先に かけておいた キビを はずして きて) [民話・桃太郎]
- (82) ワガ オッカサンラガ ハナシイテータラ (<\*ハナシイタシタロワ)。 (私  
の お母さんたちが (そんなふう) に 話しましたよ。) [談話・三根]
- (83) ゴテンノ オヒメサマン シタラ (<\*シタロワ) ッテイジョウテノ ハナ  
シ。(欠け皿をつれていって) 御殿の お姫さまに したそうだという 話。  
[民話・欠け皿]
- (84) アダンシテ コゴン ンマク ニタロウ? (どうやって こんなに じょう  
ずに 煮たんだろう?) [三根]
- (85) ワラ キネイ テレビョ ミタラ (<\*ミタロワ)。 (私は きのう テレビ  
をみた。) [三根]

一方で, こうした古くからの語形のほかに, のちの移入形とみられる東日本~東  
北的なシタ形 (ノンダ), シタッタ形 (ノンダッタ) も, 意味用法をすみわけなが  
ら伝統方言の述語形式として混在している。

- (86) ウイモ ホウダ ゾ。(あいつも 口に入れた ぞ。) [三根]
- (87) ボラーザークズリーワ イチバン ビツクリシタッタ ナー。(洞輪沢崩れ  
をは 一番 びっくりした ねえ。) [談話・末吉]

こうした伝統方言の語形とはまったく別に, あらたな傾向として強変化動詞の連  
体形にもある種のタリ形 (ノンドー) があらわれることがある。

- (88) 無理もなつきゃ。人がやっとうことがなっけことをするというのは大変なこ

とだら。[平成23年度大賀郷小学校4年生方言劇「西山物語」-西山ト神の碑より- 台本6ページ]《二重下線部はその他の方言語形》

- (89) ~テ ワカトー トキノ ショック。(~と わかった ときの ショック。) [1950年代生まれの檜立の女性]
- (90) アニデ ツットー ワケ? (なにで 釣った の?) [同上]
- (91) ダレト イットー ワケ? (だれと 行った の?) [同上]
- (92) ベラベラベラベラ シャベッテ アットー ワケヨ。(べらべらべらべらしゃべって いた のよ。) [同上]
- (93) 八丈シマから来ました, ッテ イットー ワケヨ。(八丈島から来ました, と 言った わけよ。) [同上]

これらに共通するのは、すべて連体過去形の連体用法という点である。これらは伝統方言であればつぎのようになるだろう: やっとう こと>ヤロー コト, ワカトー トキ>ワカロー トキ, ツットー ワケ>ツロー~ツロードー, イットー ワケ>イコー~イコードー, アットー ワケヨ>アローダラ~アララ, イットー ワケヨ>ヤローダラ~ヤラ。

伝統方言では、連体非過去形は語形末母音を -o にするという単純なものだが、連体過去形のほうは動詞のタイプによって、強変化動詞ノモ (ノマロ<\*ノミアロ: 飲む), 弱変化動詞オキト (オキタロ<\*オキテアロ: 起きる) の2形式にわかれる。強変化動詞では融合が第一中止形(連用形)にまでくいこんでいる(ノミ>ノマ)が、弱変化動詞では連用形に融合がおよばない(オキのまま)。これに対して第二中止形(~シテ)のほうはノンデ(古形はノッデ), オキテで、標準語とおなじタイプである。このため、オキテ・オキトとおなじ、より単純かつ規則的なやり方でノンデ・ノンドーがつくられることになる。ノンドーは語形末母音が伝統語形ノモと共通するため、これからも違和感なく方言語形に取り入れられていくだろう。なお、形式名詞ワケは伝統方言にも存在するが、このような終助辞化した用法はない。

表6 強変化動詞における非アリ形とアリ形の新旧語形

	連体非過去	連体過去	終止過去
古形	ノモ	ノモー	ノマラ
新形	ノム	ノンドー	ノンダラ
(弱変化)	(オキロ)	(オキトー)	(オキタラ)

さらに注目したいのは、後半の例(90)~(93)はすべて述語に使用されているが、はじめの例(90)(91)は疑問詞たずね文、あとの例(92)(93)は過去ののべたて文である点である。どちらにも連体過去形+ワケが使用されていて形態的には共通するが、イントネーションによって区別されている。一方、伝統方言では文の

タイプによって語形がことなる。伝統方言では、疑問詞たずね文の述語は助辞なしで連体過去形と同音語形（ノモー？）がそのまま使用されるのに対し、過去ののべたて文では連体過去形に助辞が融合または膠着した語形（ノマラ～ノモージャ）、またはノダ形に相当する語形（ノモーダラ～ノモードージャ）のかたちになる。

このように、動詞の活用のタイプにかかわらない語形である、文のタイプにかかわらない語形である、という点で、より単純化した語形になっていることがわかる。

こうした語形は、すでにあげた東日本的なシタ形やシタッタ形の移入とは無関係に、遅かれ早かれ成立が予定されていたとみてよい。あらわれるべき新たな傾向として現代八丈方言のなかにようやくあらわれたということである。

じっさい、すでに山梨県の奈良田方言（清水茂夫 1957）では、動詞過去形は連体形も終止形も、サイトー（咲いた）、タノシンドー（楽しんだ）となっている。これは方言的なノモーと中央語のノンダによるコンタミネーションであって、上代東国方言の面影を残す方言とされる奈良田方言にこのような語形が存在することは、東国方言の変化の方向性が地域を越えて共通していることを示すものとして重要である。

というのは、こうした変化はすでに中央語で過去にくりかえされたものであって、ラ抜き可能動詞ミレルの発生などと同様、日本語の大きな流れの一部であるとみてよいからである。

上代においては、強変化動詞とサ変動詞に「完了の助動詞」のついた語形であるリ形とタリ形（テアリ形）が共存していた。

- (94) 雪の色を奪ひて咲ける（佐家流）梅の花 今盛りなり 見む人もがも（5: 850）
- (95) ひぐらしの鳴きぬる時は をみなへし咲きたる（佐伎多流）野<sup>の</sup>辺<sup>へ</sup>を行きつつ 見べし（17: 3951）
- (96) かくのみにありけるものを 萩の花咲きてありや（咲而有哉）と問ひし君はも（3: 455）
- (97) わが背子が古き垣内の桜花 いまだ含めり（敷布売利）一目見に来<sup>こ</sup>ね（18: 4077）
- (98) 卯の花の咲く月立ちぬ ほととぎす来鳴きとよめよ 含みたりとも（敷布美多里登母）（18: 4066）
- (99) （略）味酒を神奈備山の帯にせる（為留）明日香の川の速き瀬に（略）（13: 3266）
- (100) 志雄路から直越え来れば 羽昨<sup>しをぢ</sup>の海 朝なぎしたり（思多理）船楫もがも（17: 4025）

一方、弱変化動詞やカ変動詞ではほぼ完全にタリ形である。

- (101) 恋ふといふはえも名付けたり（名豆気多理）言ふすべのたづきもなきは我が身なりけり（18: 4078）

- (102) 月見れば同じ国なり 山こそば君があたりを隔てたりけれ(敏太呂多里家礼)  
(18: 4073)
- (103) 父母が殿のしりへ後方のももよ草 百代いでませ 我が来たる (伎多流) まで (20:  
4326)

しかし、つぎのような例から、中央においても東国においても、上代以前は一部の弱変化動詞やカ変においてもリ形とタリ形が共存していたことがわかる。例(104)は本動詞で着アルがケルに、つぎの例(105)(106)は～シ来(き)アル(～して来た・～して来ている)の補助動詞来アルがケルに変化したものである。

- (104) わが旅は久しくあらし この我が着る (家流) 妹が衣の垢つく見れば (15:  
3667)
- (105) 秋の田の穂向き見がてり 我が背子がふさ手折り来る (多乎里家流) をみな  
へしかも (17: 3943)
- (106) 堀江越え遠き里まで送り来る (於久利家流) 君が心は忘らゆましじ (20:  
4482)

こうしたキアルからケルへの変化は、ノミアルからノメルへと変化した強変化動詞のそれとおなじである。そしてこれの東国方言形であるノミアル>ノマルとおなじ変化が、東国方言の弱変化動詞「着る」のこのかたちやキアリからの変化とされている助動詞「けり」にもおこっている。変化は融合と脱落を含むが、東国方言のこの変化が単なる脱落かどうかは現段階では保留する。

- (107) 筐が葉のさやぐ霜夜に七重着る (加流) 衣に増せる児ろが肌はも (20: 4431)
- (108) 旅とへど真旅になりぬ 家の妹が着せし衣に垢つきにかり (都积尔迦理) (20:  
4388)

このような現象から、まず弱変化動詞からタリ形化がはじまってやがて完成し、つぎの段階で強変化動詞でもタリ形化がおこった可能性が指摘できそうである。上代は弱変化動詞ではそれがほぼ完成し、強変化動詞ではまさに混在していた時代である。中古にいたって、強変化動詞においてもタリ形化が完成し、動詞全体がタリ形化する。

このことは、上代以前の時代にはタリ形は存在せず、動詞の完了形すべてが「連用形+存在動詞アリ」というリ形だけだった可能性、あるいはすくなくとも、弱変化動詞でもリ形とタリ形が共存していた可能性を示す(共存以前の段階はやはりリ形だけだっただろう)<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 上代中央語では母音の甲乙の関係から弱変化動詞にアリが直接はつかなかったため、テを伸立ちにしてテアリをつくり、それがタリにかわった、という見方もあるようだが、一方の東国方言では中央ほど甲乙の区別が明確に書き分けられていない。その理由として考えられるのは、少なくともこの時代の東国方言には甲乙の区別がなかった、という可能性で

しかしこの語形はアリが母音はじまりであるため前要素と融合しやすく、その結果、前要素の母音を変化させてしまうため、そうならないような、より単純な方向へ向かおうとしたのだろう。まず変化のより単純な弱変化動詞が中止用法の～シテをもとにした語形から、～シの末尾母音を変化・融合させずに、テアリを融合させてタリにすることで膠着的にする。

こうして、上代には弱変化動詞におけるこの変化＝タリ形化はすでにほぼ完了し、あわせてリ形がほぼ消滅していた。そして、もともと母音交替の豊かな強変化動詞もこれにひきずられていき、上代はまさに勢力を失っていくリ形と、ぎゃくに勢力を強めていくタリ形が混在している状態だったということだろう。

こうした上代語の状況と比較すると八丈方言はどうなるだろうか。伝統的八丈方言では弱変化動詞はタリ形、強変化動詞はリ形であるが、これは中央でいえば、強変化動詞はタリ形のない上代以前、弱変化動詞ではほぼ上代とおなじでリ形の消滅以後に対応する。こうした状況が八丈方言ではつい最近まで続いていたということである。それがここ数十年のあいだに、あらたな現象として強変化動詞のタリ形化がおこった。現在は個人差、世代差はあるものの、強変化動詞のタリ形化が進行しつつある状況で、いずれ何十年かのちには強変化動詞のタリ形化が完成するだろう<sup>4</sup>。しかし、そのためには八丈方言自体が消滅せずに、あくまでも伝統方言として変容していくということが前提となる。

## 5. 保存・教育・再活性化

2009年のユネスコ発表以後、八丈町でも方言の保存や再活性化の取り組みが活発になってきている。ここではその概要を紹介する。

はじめに学校教育に関わってであるが、2009年から毎年夏に小中学校の教職員向けに八丈方言研修会を実施している。2009年9月には全小中高生を対象に代表的な12の方言語彙の調査を実施した。

また、地元の劇団などによって、島の民話をモチーフにした方言劇などが島内の小中学校で何回か巡回上演されている。文部科学省の「児童生徒のコミュニケー

ある。むしろ、ある程度の区別がなされていることの意味を考えるなら、そして、東国方言的にあらわれるべき語形がかなり中央語寄りに「修正」されて表記されていることを考えるなら、筆記したのが東国方言に十分精通していない中央の知識人（部領使）で、東歌や防人歌を自身の中央語的な言語感覚～耳に引き寄せて筆記した結果である、とみることも十分に可能なのである。「青柳の張ラロ川門に(3546)」や「子らは逢はナモ(3405)」などに対して、「雪かも降ラル(3351)」「恋に死ナムを(3491)」など、東国方言らしいフラロやシナモではない中央語的な-u連体形がそうであるし、時代がくだって、ほかの巻では「の」としかよまない「努・怒」を、この2巻では強引に歌の解釈のほうにあわせようとして中央語的に「ぬ」とよもうとするとところなど(金田章宏2002)にもその傾向はみられる。

なお、リ、タリに関する研究については、研究史もふくめて、鈴木泰(2009)によくまとめられている。

<sup>4</sup>筆者は強変化動詞のタリ形化がこのまま進行することが妥当であるとは考えていない。伝統方言の保存・再活性化を目指すのであるなら、より古いタイプの伝統方言が生きて存在するかがり、そちらのほうを保存・再活性化の対象とすべきであると考え。(金田章宏2012)

ション能力の育成に資する芸術表現体験」による小中学校での方言劇なども、2011年度までに5回ほど行なわれている。

生涯教育（社会教育）に関わる活動としては、市民を対象とした八丈方言講座がこれまでに5回開催されている。これには筆者も関わっているが、そのうちの4回め（2011年10月実施）は、方言活性化の活動が活発な奄美の与論島から菊秀文氏を講師に招き、活動の実際や方向性などを紹介していただいた。

また、教育委員会の少ない予算から、島の古老の方言による民話のDVDを作成したり、2011年春には「八丈・島ことばかるた」を作成して、かるた大会も開かれている。

こうした活動がはじまったことにより、島民の意識もじょじょに高まってきている。たとえば「島ことばかるた」であるが、これは三根地区の方言をもとに作成されている。これに対して、ほかの地区からはそれぞれの地区のかるたも作成するよう要望が出てくる。そうするとたとえば「え」の札は「えーたば」（アシタバ）で、中之郷地区などでは「やたば」となるため、機械的に置き換えられなくなるのであるが、そうした要望にもこたえて、「改訂・五地域版 八丈・島ことばかるた」がこの6月に完成し、島内で市販もされている。

また、ことし9月には町教育委員会の協力を得ながら、国立国語研究所のプロジェクトによる共同調査が予定されている。これは2010年の喜界島方言調査、2011年の宮古島方言調査につづくもので、今回は20名ほどのベテランから若手までの研究者が1週間近くわたって現地調査を行なう予定である。

ユネスコの発表以後、さまざまな組織や個人の活動が目立つようになっていて、方言を保存・再活性化していこうという意識がたしかに高まってきている。この流れに乗って、これまでは使えるのに使ってこなかった中高年層の潜在的方言力を顕在化させ、子どもたち、若者たちの方言獲得に役立てていく必要がある。そしてその際に重要なのは、方言話者が少なからず存在する八丈島だけではなく、おなじ八丈方言圏に属し、より古風なすがたを保存しながらも方言話者がきわめて少ない青ヶ島とともに、自治体の枠をこえ足並みをそろえて活動していくことだろう。

琉球諸方言とことなり、八丈方言にとって保存や再活性化にきわめて有利にはたらくのは、八丈方言圏内のバリエーションがほとんど音声音韻的なレベルであり、文法的には一つであるといってしまうもいいぐらいの差しかない点である。したがって、そうした共通の文法書をベースにしながら、地区ごとの若干の文法的相違点を記述することができれば、あとは長母音や二重母音を中心とする音韻の対応関係について地区ごとに記述し、それぞれの地区のテキストを用意することで、保存・再活性化の土台はできあがる。

地元住民、行政、研究者の良好な協力体制を築きながら、いかに長期的に活動にしていかが、これからの大きな課題である。

## 参 照 文 献

- Dikins, F. V. and Ernest Satow (1878) Notes of a visit to Hachijō in 1878. 『日本亜細亜協会会報』 6: 435-477.
- 八丈島教育会 (編) (1909a) 『口語取調書』. 稿本.
- 八丈島教育会 (編) (1909b) 『音韻取調書』. 稿本.
- 服部四郎 (1968) 「八丈島方言について」『ことばの宇宙』 11: 92-95.
- 平山輝男 (1958) 「青ヶ島方言の所属」『国学院雑誌』 59: 301-306.
- 北条忠雄 (1948) 「八丈島方言の研究—特に上代性の遺存について— (1) (2)」『日本の言葉』 6: 84-88, 7: 13-29. 東京: 日本の言葉研究会.
- 保科孝一 (1900) 「八丈島方言」『言語学雑誌』 1: 171-182, 293-300, 441-451, 744-769, 1161-1168.
- 飯豊毅一 (1959) 「八丈島方言の語法」『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』 215-232. 東京: 国立国語研究所.
- 伊藤一也 (1983) 「千葉方言の文法」千葉大学教養部総合科目運営委員会『琉球方言と周辺のことば』 65-105. 千葉: 千葉大学.
- 鶴窓婦山 (1848) 『八丈の寝覚草』(勉誠社文庫 (1985)). 東京: 勉誠社.
- 金田章宏 (1995) 「保科孝一著『八丈島方言』をよみなおす (1)」『千葉大学留学生センター紀要』 1: 41-74.
- 金田章宏 (1999) 「八丈方言 談話資料 2 中之郷方言」千葉大学大学院社会文化科学研究科『琉球方言音韻・文法・語彙の研究』 129-159. 千葉: 千葉大学.
- 金田章宏 (2000) 「保科孝一「八丈島方言」の百年」『国文学解釈と鑑賞』 1: 72-84.
- 金田章宏 (2001a) 『八丈方言動詞の基礎研究』東京: 笠間書院.
- 金田章宏 (2001b) 「八丈方言の談話資料と文法解説」真田信治 (編) 『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (1)』 115-226. 大阪: 大阪学院大学.
- 金田章宏 (2002) 「東国方言の文法と八丈方言」『国文学解釈と鑑賞』 11: 94-104.
- 金田章宏 (2012) 「八丈方言の価値」, 第 5 回八丈方言講座資料 (3 月 18 日配付).
- 金田一春彦 (1955) 「日本語 (方言)」『世界言語概説』下: 212-238. 東京: 研究社.
- 金田一春彦 (1967) 「東国方言の歴史を考える」『国語学』 69: 40-50.
- 小林賢次 (1968) 「否定表現の変遷」『国語学』 15: 45-62.
- 国立国語研究所 (1950) 『八丈島の言語調査』, 国立国語研究所報告 1. 東京: 国立国語研究所.
- 工藤真由美 (2000) 「八丈方言のアスペクト・テンス・ムード」『阪大日本語研究』 12: 1-20.
- 日本放送協会 (NHK) (編) (1966) 『全国方言資料 7—へき地・離島編 (1) 東北・関東—』東京: 日本放送出版協会.
- 奥山熊雄・金田章宏 (1990) 「八丈島三根方言動詞の形態論 アスペクトをめぐる」『国文学解釈と鑑賞』 7: 133-142.
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 (校注) (2002) 『新 日本古典文学大系 萬葉集 三』東京: 岩波書店.
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 (校注) (2003) 『新 日本古典文学大系 萬葉集 四』東京: 岩波書店.
- 清水茂夫 (1957) 「奈良田ことばの語法」『甲斐民俗叢書』 3: 69-120. 山梨: 山梨民話の会.
- 鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』東京: ひつじ書房.
- 東条操 (1934) 「関東方言」『国語科学講座 VII 本州東部の方言』 37-55. 東京: 明治書院.
- 上村幸雄 (1971) 「なぜ方言を研究するか」『教育国語』 26: 27-43.
- 上村幸雄 (1975) 「3 八丈島の方言」『方言と標準語』 14-18. 東京: 筑摩書房.
- 山崎良幸 (1965) 『日本語の文法機能に関する体系的研究』東京: 風間書房.

執筆連絡先:

[受領日 2012 年 4 月 30 日]

〒 263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

最終原稿受理日 2012 年 6 月 27 日]

千葉大学国際教育センター

akane@faculty.chiba-u.jp

## Abstract

**The Recent *Nomō/Nondō*-Type Change in Hachijō Verb Conjugation Compared to the Shift from *Nomeri* to *Nomitari* in Old Japanese**

AKIHIRO KANEDA

*Chiba University*

The Hachijō dialect has retained many grammatical features of eastern dialects of Old Japanese in the Nara Period, which can be observed in the *Azumauta* of the Man'yōshū. This paper gives an outline of studies on the Hachijō dialect as well as a brief description of the dialect itself as it is spoken in its traditional form. The position of this dialect as an endangered language and a recent verb conjugation change are discussed. The change in question concerns the strong conjugation, in which the *ari*-type forms that express both perfective and past (e.g., *nomō*) are being replaced with simplified *tari*-type forms (e.g., *nondō*). Remarkably, a similar change—represented by the shift from *nomeri* to *nomitari*—occurred during the transition from Old (Nara Period) Japanese to Early Middle (Heian Period) Japanese, which led to the disappearance of *nomeri*-type forms. This fact suggests that all perfective forms of verbs before the Nara Period might have been of the (*nomiari*>) *nomeri*-type, and that the shift to (*nomiteari*>) *nomitari* took place initially in the weak conjugation and later in the strong conjugation.